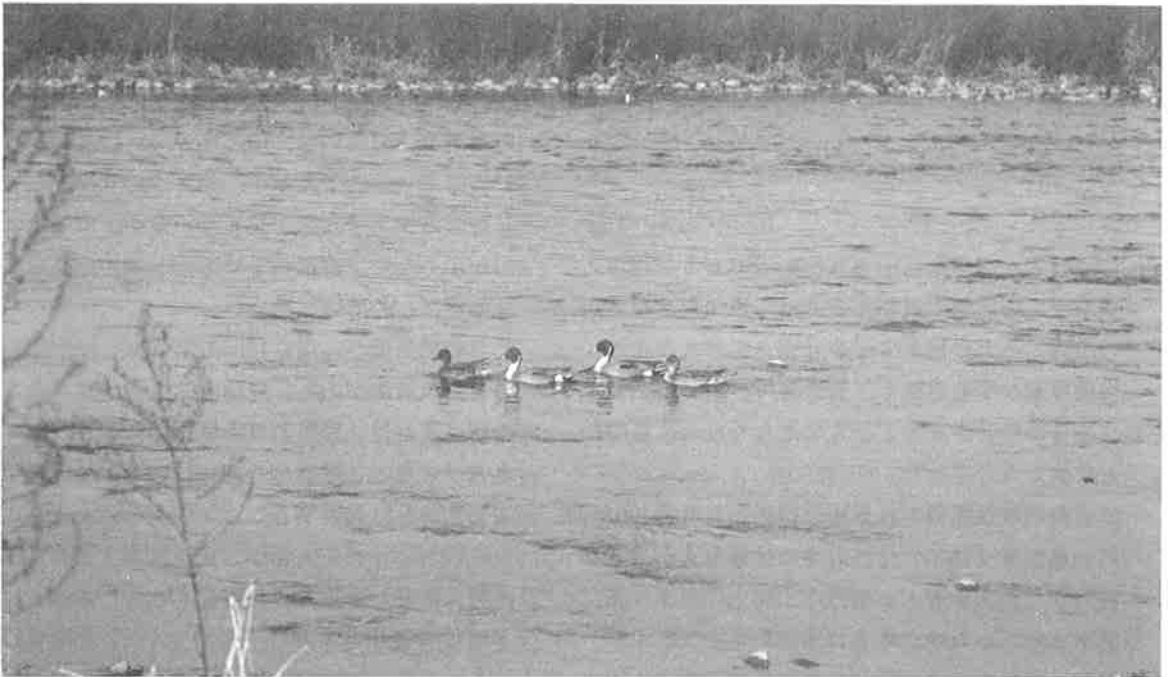


財団だより

# 多摩川

1981. 12. 第12号

汚れた水域に生息する  
ホシチョウバイ

冬枯れと渡り鳥(浅川)

## ■多摩の地名■

### ④ 多摩の語源

○タバは峠のこと

早大教授水野祐氏が『昭島市史』で、次のようにのべている。

タバは古朝鮮語で峠のことである。峠という語はアルタイ語族間では皆共通語として、同一語源の語が流通している。それ故日本語のタバは、原日本語の段階でも峠を意味する古語であったと思われる。

丹波川という名の由来は、丹波山峠を越えていく甲武の古街道に沿って流れる川を「峠の川」すなわち「タバガワ」とよんだものであろう。

「峠の川」という意味で名付けられた「タマガワ」の名称が、やがてその溪谷沿いに移動しながら生活を営む人びとによって上流から中流へ移され、多摩川の語源をなしたのであろう。

タバについて二つの解釈を紹介したが、何れにしても、川の上流の山深い村をタバとよんでいたとすれば、川下の村々の人々が、タバから流れてくる川を、タバ川とよんだとしてもふしぎはなかったろう。

次に多摩「タマ」とよむ場合を考えてみたい。

『万葉集』では「多麻河」とか「多麻の横山」とか、「タマ」とよんでいる。平安時代になっても、延喜五年(927)に編纂された『延喜式』には、「多磨」「多麻」が使用されている。(神名帳・民部式)

これを見ると、平安初期には、多摩はタマとタバと両様によばれていたようにみえる。それはおそらく「タマ」が「タバ」または「タワ」ととれるような発音をされていたのではあるまいか。

(次回続く)

(多摩の地名・保坂芳春・1979・武蔵郷土史刊行会)

## 多摩川散歩

● 日野用水堰から浅川と多摩川合流点へ



田中 紀子

日野用水堰は八王子と日野の境にある谷地川と多摩川の合流点附近にある。この辺は最近谷地川の改修でその景観をすっかり変えてしまったが、以前は家が一軒もなく、近くにある「お茶屋の松」（落合の松）が、どこからでも見られた。この松も排気ガスで枯れた。（昭和50年）

日野用水が整備されたのは、今から凡そ400年前の元亀元年（1570）に、名主の佐藤隼人が、北條氏照から囚人をもらい請けて、用水の土木工事に従事させたからであるという。

この日野用水によって、日野宿は多摩川の水を利用し、各地に引水して米づくりを行なったので、八丁田圃をはじめとして水田が多く、東京の米倉とまでいわれた。そして昭和30年代までその名残りをとどめていた。

日野用水路には、あちこちに石橋がかけられ、東光寺、四谷、宝泉寺の石橋には石橋の碑まで建てられている。石橋はこの他に金子橋、大門橋などがあり、昔は石橋一つ作るのにも大仕事であったことがうかがわれる。

日野用水堰から200m程下流の多摩川の河川敷からクジラの化石が見つかったのは、昭和46年であった。発見場所は成就院裏の多摩川べりで、発見者は渡辺焄さん、クジラは大きなものではないが、500—600万年位前の、この辺が海底であった頃の痕跡をとどめている。この化石は日野市中央図書

館二階に展示されている。クジラの化石は昭和36年に昭島でも発見された。

成就院裏から、中央線日野橋鉄橋までの多摩川右岸は、洪水の時の被害の跡が所々にあり、そのたびに護岸工事が行われたが、この辺は多摩川の流れが近くまで来ており、この日野橋鉄橋の上流および下流は釣り場として親しまれている。

ここは対岸の立川市では鉄橋をはさんで、上流にも下流にも河川敷公園を作っていて、対岸の日野側とは対角的であるが、絶好の釣り場としての日野側には常に人影が見えているが、公園には人影がすくない。自然のままの方が親しみ易いことを如実にしめていて面白い。

日野橋鉄橋から更に150m位下流に、旧甲州街道の日野渡般場がある。堤防近くまで人家があるが、堤防に上れば一望にして多摩川の河原及び対岸が見渡せる。ここは貞享（1684）の頃、甲州街道が一部変更し、渡船場もここに変更した。ここには大砲坂という坂があるが、大正10年大演習があった折、渡船からおろした大砲をここからひっぱり上げた名残りである。

そこからすぐ下流に現在の甲州街道日野橋がある。この橋は昭和15年に開通したが、当時はこの辺には松林があり、殊に対岸の立川辺りには多かったが、今は日野橋近くの古谷邸にその面影をとどめるばかりである。

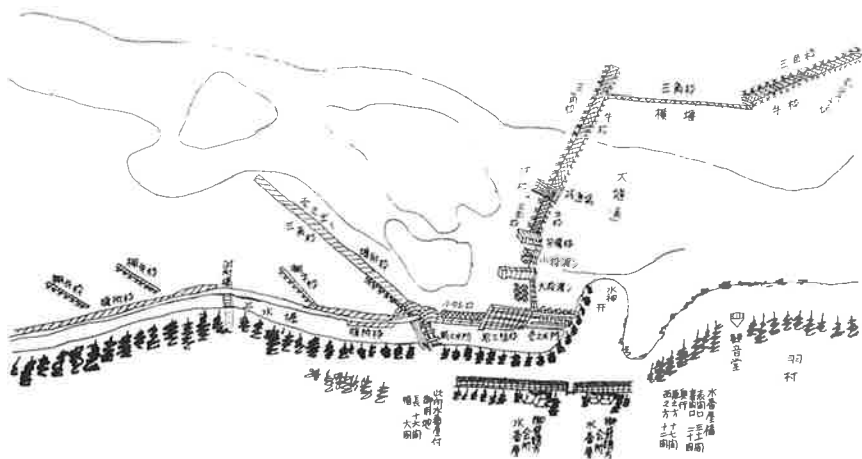
日野橋から下流の中央高速多摩川橋までは絶好の自然観察地で、四季を通じて植物、野鳥、水生動物などが、訪れる人々を楽しませてくれる。この多摩川橋下は昔の甲州街道万願寺の渡しのあった所で「王手は日野の万願寺」の諺があった程の要地であった。この近くには河原の中に湧水池があり。野鳥の群が常に来ている。

ここから分流点までの間に、日野グランドがあり、附近はオートバイが走りまわっていて、せかくの自然を踏みにじっているのが残念である。

多摩川水系自然保護団体協議会幹事

## 私と多摩川

「玉川上水水元絵図並諸粹図」より（『上水記』第2巻）



### ●羽村堰

日本水道協会特別会員 堀越 正雄

こんど機会があって、『上水記』をくわしく見ることができた。『上水記』は昭和52年に東京都の有形文化財に指定されてから、関心の度もいちだんと高まってきたようだ。こんど初めから終わりまで時間をかけて通覧できたのは、たいへん幸運だった。

それも今年の都の水道局職員文化祭で、特別番組と銘をうたれ、「江戸の暮らしの中の水」という題でスライドを交せて1時間ほど話すようにということで、とくに『上水記』は、局職員でもまだ見たことのない人が多いので、『上水記』の中の絵図の部分だけでもスライドにして見せたい、その解説もたのむ、という依頼を受けたときから、ツキは私の方に廻ってきたというわけである。

水道局所蔵の『上水記』は、玉川上水開削からほぼ140年近くを経過した江戸時代も後期につくられたもので、そのころ江戸の水道工事の監督、管理の職にあった幕府普請奉行上水方道方（いまの水道局長兼建設局長とでもいえようか）の石野遠江守広通が、3年がかりで寛政3年(1791年)に完成したという、江戸水道の施設概要および管理に関する貴重な記録である。

全部で10巻あり、この中の第2巻が「玉川上水水元絵図並諸粹図」という羽村取入口付近の詳細

をきわめた原色図で、縦1.37メートル、横2.12メートル、実に見事に描き上げられている。スライドにするついでに、羽村堰の施設そのものや周辺の細部にわたってこまかく書きこまれた文字などもすべて写しとることができたのは、大きな収穫であった。

取入口のそばから、多摩川に直角にケタを渡し松丸太・粗朶・むしろ等で流れをせきとめ、水を取り入れるのが投渡堰で、川の水が一定量以上になると、ケタを吊り上げてせきを払うようになっている。

投渡シは、水制・取水・水量調節のために設けられ、大投渡シと小投渡シの2つが見える。水門は壺之水門・弔之水門の2ヵ所があり、差蓋の上げ下げで水量調節が行なわれた。水門内には吐口があって、余分な水はここから吐かせた。水門内に推積した土砂を除去する時にも利用した。

筏通場が見える。水門口から20間はなれたところにあり、幅4間、長さ2間の水路に修羅木を8本並べた。出しというのが、水門下の堤通りに設置された。当時は多摩川本流が上水堀間近くに接近していたため、上水堀堤を防護するためのものである。

いまでも羽村取水所のあたりは、随所に歴史の面影を残している。投渡堰を中心とした川筋も、『上水記』の古絵図とそう変っていない。そういえば昔ながらの構造をもった「なぎはらい」が今でも台風時には行なわれているという。

それにしても、今から300年以上も前に、多摩川のここの地形を考え、取入口を開発した先人の知恵には、まったく頭のさがる思いがする。

よみがえ

## 甦れ！多摩川



冬の登戸付近・コイ釣り

## ●ぼくの願い

岡村 道雄

ぼくは、お父さんと小田急の登戸あたりの多摩川にときどきつりに行きます。コイ、フナ、ヤマベ、クチボソなどがつれます。多摩川では、大ぜいの人がつりをしています。とくに日曜日などは、魚と人とどちらが多いのかわからないほどです。

この間、35センチぐらいのコイをつりました。あまりあたりがないのでよそ見をしていたら、お父さんが急に、「おい、きているぞ」というので、あわてて見るとウキがしずんでいました。パッとさおをあげたら、「ガツン」と根がかりのような強いショックのあと、魚は右へ左へにげまわりました。ぼくは必死でさおをためました。さおは、おれそうになるほど弓のように曲りました。ぼくは、後へさがり、ようやく魚を岸へよせました。くたくたになりましたが、大物をつった喜びでいっぱいでした。

魚をつった人は、みんなこんな気持だろうと思います。多摩川は、多くの人々を楽しませてくれます。みどりが多くて、散歩やハイキングにもいいところですよ。野鳥もたくさんいます。

でも、このあたりの多摩川はあまりきれいではありません。水はにごっているし、ゴミも流れてきます。もがくさっている所もあります。川岸に

は、ゴミがちらばっています。夏休みに奥多摩と秋川へ行きましたが、水はきれいにすんでいました。川底をざるですくうと、水のきれいな所にいるカワゲラ、トビゲラ、カゲロウなどの幼虫がとれました。登戸あたりでは、これらの虫はほとんどいなくて、いるのはヒルやイトミミズです。このことからみても、多摩川の中流はかなり汚れが進んでいるといえます。

『川』や『多摩川』で汚れの原因を調べてみると、工場からの排水、生活排水などが川を汚していることがわかります。でもぼくが一番目につくものは、つり人がすてるゴミです。空きカン、つりえさのふくろ、つり糸、おべんとうのはこなどがいっぱいちらばっています。ビニールやナイロンは永久にくさらないそうです。このようなゴミが流れていくと、海まで汚してしまいます。これでは、下水がつくられ、工場が排水に注意しても多摩川はきれいにはなりません。

つり人はぜったいにゴミをすててはいけなと思います。自分が出したゴミを持ちかえることは、だれでも、今すぐにできることです。

昭和のはじめごろには、登戸あたりでも、アユ、ウグイ、カジカなどがたくさんいたそうです。ぼくがつっているコイ、フナ、オイカワは汚れに強い魚です。多摩川が昔のようにきれいになって、アユやウグイがもどってくればどんなにすばらしい多摩川になるでしょう。

(世田谷区立経堂小学校4年)

今回の甦れ！多摩川は、岡村君が夏休みの自由研究のレポートを財団に送って下さった事から、特にこの項を担当していただいた。レポートは、“多摩川の汚れ”と題した良く整理された立派なものでした。その感想文という主旨で改めて原稿をいただいたものです。

# 《多摩川およびその流域の環境浄化に関する》 調査・試験研究” 募集

当財団は、昭和50年から表記研究の公募を毎年行なってきました。既に98件の研究に対し助成金を交付し、38件の研究成果を得ることが出来ました。

昭和57年度も引き続き「多摩川およびその流域の自然環境・社会環境の調査・試験研究」をひろく募集いたします。

対象者は、多摩川およびその流域の環境問題に関する調査・試験研究の意欲のある方でしたら、どなたでも応募できます。

## 研究対象

- (1) 産業活動または生活環境と多摩川およびその流域との関係に関する調査・試験研究
- (2) 排水廃棄物などによる多摩川の汚染の防除に関する調査・試験研究
- (3) 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査・試験研究
- (4) 多摩川をめぐる自然環境の保全・回復若しくは創造に関する調査・試験研究

等、多摩川の環境行政、多摩川住民の方々のために参考となる研究でしたら、基礎的研究、実験研究いずれでも結構です。

年度別助成件数・助成金額

年 度	助 成 件 数			助成金額 (円)
	新規	継続	計	
昭和50年度	6	—	6	9,500,000
昭和51年度	5	6	11	19,994,120
昭和52年度	23	3	26	30,269,910
昭和53年度	14	19	33	31,294,340
昭和54年度	18	18	36	40,256,730
昭和55年度	19	19	38	41,950,050
昭和56年度 (10月31日現在)	13	18	31	43,160,900
合 計	98	83	181	216,426,050

公募締切日 昭和57年 1月29日

応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。

〒150 東京都渋谷区渋谷 1丁目16番14号(地下鉄ビル内)

電話 (03) 400-9142

(財)とうきゅう環境浄化財団

## 財団の事業紹介

### 〈研究助成〉

昭和56年度（第2次選考）研究助成課題が、このほど決定しました。今回決定した研究は、A類研究1件、B類研究2件です。研究課題は次のとおりです。

研 究 課 題	代 表 研 究 者	所 属
<p>〈A類研究〉</p> <p>●多摩川河川敷植物群落の動態解析</p>	廣 井 敏 男	東京経済大学教授
<p>〈B類研究〉</p> <p>●多摩川におけるミズムシ (<i>Asellus hilgendorfi</i>) およびシマイシビル (<i>Herpobdella lineata</i>) の分布 — <math>\alpha</math> 中腐水性水域の確定—</p> <p>●多摩川の自然と小学校理科教育の教材として活用 する方法の研究</p>	小 林 貞  加 藤 和 俊	私立カリタス女子高校教諭  稲城市立稲城第三小学校教諭

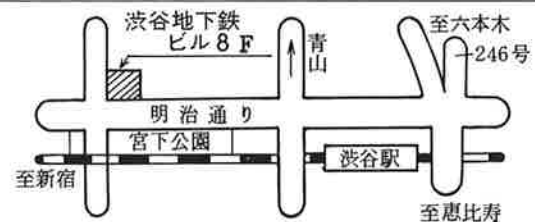
### 〈多摩川雑感〉

11月15日の朝刊に多摩川でサケが釣れたという記事が載っていました。サケの上はこのところ北海道の豊平川、荒川などでみられ新聞を賑わしている。本来、サケの天然ソ上の南限は利根川とされ多摩川には上ってこなかったとされるが、最近、多摩川にも人工ふ化させた幼魚を放流しようという動きがあるとも聞く。しかし、なんだかサケと多摩川というイメージは何とも結びつかない気がする。このサケは、おそらく迷い込んだものに違いないが、登

戸付近で力つきて釣り人にすくわれたものらしい。それより、やはり、多摩川にふさわしい魚はアユだろう。水質改善のきざしはみえても、まだ豊平川のサケのような大群を多摩川のアユでみる事はできない。

甦れ！多摩川で岡村君が書いていたように、魚はそれぞれの川に応じた棲み分けを行なうものである。コイやフナよりもアユやウグイの息がまざるように、まつする事が先決なように思える。

- 発行日 昭和56年12月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)400-9142



\*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1  
TEL (0488)31-8125